

影山輝國編著『新明解 現代漢和辞典』

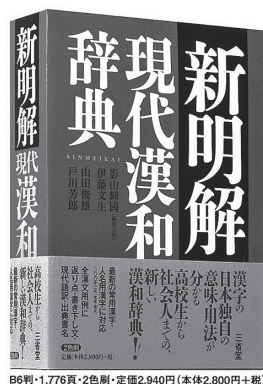
伊 藤 好 美

本書は、影山輝國先生が編集主幹となって刊行された漢和辞典である。親字は、常用漢字二一三六字（平成二二年一月内閣告示）、人名用漢字八六一字（平成二二年改正）、そのほかに必要な漢字と、それらの異体字などおよそ一〇七〇〇字を採用する。また、熟語は、日常的に用いられる基本語に加え、中国古典の読解に必要な語、およそ五四〇〇〇語を厳選して収める。

「はしがき」には、従来の漢和辞典と本書との違いが記される。従来の漢和辞典には、二つの流れが存在する。一方は、純粹に漢文解説に資することを目指して漢字・熟語の古代中国における意味・用法を詳述するものであり、他方は前者とは反対に、漢字・熟語は既に日本語であるとの立場から、日本における意味・用法を記述するものである。

影山先生は、この二つの流れを一本の木にたとえ、「一方はふだん隠れていてあまり現れない本源的存在である木の根に焦点をあてたものであり、他方は地上に生い茂る木の幹や枝葉を見渡したもの」とする。また、それらを時間にとえ、と、「一方は過去に重点を置いたものであり、他方は現代に着目したもの」であるという。つまり、従来の漢和辞典のように片方の流れのみに沿って、は、木々の全体像が見えず、過去から現代までの時間の流れを通観することができないという問題点がある。

これに対して本書は、木々の全体像を示し、過去と現在とを比較してその違いがわかる辞典となることを目指して編まれた、新しいタイプの漢和辞典である。影山先生が一九九八年に世に送り出した『例解新漢和辞典』は、現



B6判・1,776頁・2色刷・定価2,940円（本体2,800円＋税）

代の普通の文章に現れる漢字語を詳しく解説して好評を博した。本書は、その『例解新漢和辞典』をもとにして漢字を増補し、漢字の意味説明をより充実させ、さらに、詩韻・現代中国音表示・古訓などの補充とともに、中国古典に見える多くの熟語も追加している。また、漢字・熟語の原義と、日本における意味・用法の広がりなどが区別して示してある。即ち本書は、従来の漢和辞典における二つの流れを一冊で網羅した辞典と言える。

さて、本書を用いる際には、まず、「この辞書の構成と使い方」の頁に目を通すことになるだろう。ここには、二色刷である本書の色分けの意味や、記号の意味等の丁寧な説明がある。これを読むことにより、漢和辞典に不慣れた学習者が抱きがちな、「辞書の見方がわからない」という不安は軽減されるはずである。

そして、本文を開くと、本書が新しいタイプの漢和辞典であることを実感できる。本書の顕著な特徴は、「日本語での用法」という項目を持つ点にある。たとえば、「若」という字は、「日本語での用法」として、『ジャク』『わか』《わか》という読みや、「年がすくない。おさない。できてから時がたっていない」という意味などを示す。この項目で区別されることにより、学習者は、中国語の「若」に、日本語を母語とする者にとって一番馴染みのある「わ

かい」という意味がないことを知る。また、熟語項目では、日本人が普通に用いる和語・和製漢語、及び、中国起源の熟語であっても日本で付与された新しい意味は、「日」を四角で囲んだ記号を用いて表示する。こうしてあることで、学習者は、中国古典中に出てくる「若輩」という語を、「年が若く未熟な者」という日本製の意味で捉えてはいけな」とわかる。

これらの工夫は、学習者にとって非常に重要な助けとなる。もし、初学者が中国古典を読む際に、中国語本来の字義や語義と、日本独自の字義や語義とが区別なく並べられた辞典（『大漢和辞典』等）を用いてしまったら、中国では決して用いないような字義や語義に惑わされ、文を誤読する恐れが生じるからである。

漢和辞典に日本独自の字義や語義を載せなければ、初学者が惑わされることもない。にもかかわらず、多くの漢和辞典は何故それらを載せるのだろうか。中国学を専攻する人たちの中には、「漢和辞典は四書五経を読むための字引である」とする観念が今に至るまで牢固として存在するという。「四書五経を読むための字引」に日本独自の字義や語義を載せる必要はなく、そのような字引を用いれば漢文の誤読が生じる恐れも減るだろう。しかし、純粋に中国古典を解説するに徹した辞典を活用できるのは、実際には中

国学の専門家に限られてしまう。そのため、多くの漢和辞典は、幅広い人たちに役立つ辞典を目指して、日本独自の字義や語義をも載せるのである。だが結果として、それが初学者の混乱のもととなっている。

かかる問題点を踏まえると、現代日本で最も広く役立つ漢和辞典とは、中国古代の意味用法と現代日本での意味用法を併記しながら、しかも、初学者の誤読を招かないように、日本独自の字義や語義、熟語については日本製であることを区別して表示するものであると明らかとなる。そして、本書はそれを成し得た理想的な漢和辞典と言える。「理想的な」と口で言うのは簡単だが、理想を具現化することは容易ではない。本書を刊行するにあたり、「その熟語は本当に日本で作られたのか」、「その意味は日本で新しく付与されたものなのか」と判定するために、どれほどの使用例が検討されたのかと想像するだけで、本書に注がれた膨大な労力を思い知らされる。

さらに、本書の魅力は、本文のみならず付録にまで及ぶ。本書は十六種もの抱負な付録を収載するが、中でも特筆すべきは、「旧国名（州名）地図」である。我が国の旧国名で中国風に「州」を付ける名称は、「信州」「甲州」「長州」など馴染み深いものもいくつかあるが、実はその大半が知られていない。しかし、聞き覚えのない国名であつても、

この地図を開けば、現在の都道府県で言うところにあたるかを確認することができる。たとえば、「和州」とは現在のどこにあたるか、なぜ「和州」と呼ばれたのか、ということも本地図を見れば理解できる。旧国名をすべて州名で表記し、それを地図上で示した辞典は、本書が初である。

そのほかの付録も充実しており、「中国歴史地図」は二色刷である本書の長所を生かして、美しく見やすいものとなっている。また、天気予報などでもよく耳にする「二十四節季」を調べたり、「親族関係表」から遠い親戚をどう呼ぶかなどを知ることもあるため、中国古典を専門とする学習者でなくとも役に立つ。辞書を取り出すと、パラパラと開いた付録に思わず心を奪われてしまうことがあるが、本書を使用する際には、その時間が長くなり過ぎないように特に注意したいと思う。

従来の漢和辞典の問題点を解決し、新しい方向性を切り拓いた本書は、中国古典の学習者はもちろんのこと、幅広い人たちが「役に立つ」「面白い」と思える辞典である。

（B6版、一七七六頁、三省堂、二〇一二年一月刊行、二八〇〇円＋税）

（いとう よしみ・実践女子大学大学院博士後期課程）